

生物科学学会連合 第22回連絡会議 議事録

日時：2009年1月26日（月）14:00～16:00
場所：東京大学 山上会館 201・202 会議室

出席：宮島 篤（生科連2009-2010年代表・日本生化学会）
浅島 誠（生科連前代表・日本動物学会）
松田 裕之（個体群生態学会） 宮本 武典（日本味と匂学会）
石和 貞男（日本遺伝学会） 岩崎 博史（日本遺伝学会）
山下 雅道（日本宇宙生物科学会） 岡部 繁男（日本解剖学会）
橋本 哲男（日本進化学会） 山根 慶子（日本神経科学学会）
入江 賢児（日本細胞生物学会） 中村 研三（日本植物生理学会）
北 潔（日本生化学会） 嶋田 正和（日本生態学会）
鳩貝 太郎（日本生物教育学会） 曾我部正博（日本生物物理学会）
漆原 秀子（日本発生生物学会） 小泉 修（日本比較生理生化学会）
山本 和俊（日本比較内分泌学会） 木暮 一啓（日本微生物生態学会）
福田 博（日本分子生物学会） 三宅 健介（日本免疫学会）
（計20学会22名）
オブザーバー：中野 明彦（日本学術会議生物科学分科会前委員長）
毛利 秀雄（国際生物学オリンピック日本委員会委員長）
事務局：中西 秀彦 山口 恵子

欠席：日本植物学会 日本神経化学会 日本生理学会 日本薬理学会
（計4学会）
（敬称略、学会名五十音順）

議長：宮島 篤

・本連絡会議は本年度第一回目の定例連絡会議に相当するため、「運営に関する申し合わせ事項」第3条により本連絡会議は成立した。なお、2/3以上の会員の出席が確認されたため、同申し合わせ事項の付則2により、本連絡会議における満場一致の議決事項については生科連の決定事項として採用される。

議題：

1) 前回議事録の承認

前回議事録案が確認され、承認された。

2) 新規入会学会の紹介（日本味と匂学会）

日本生物物理学会および日本比較生理生化学会の紹介により1月17日付で入会した日本味と匂学会の宮本連絡委員から挨拶があった。同学会の入会に伴う「生物科学学会連合の運営に関する申し合わせ事項」への改定案が確認され、承認された。

3) 平成20年度会計報告

事務局より報告が行われ、承認された。

4) 新代表就任に伴う副代表の推薦と承認

宮島代表より新副代表として入江連絡委員が推薦され、承認された。

5) サイエンスアゴラセミナー参加報告

「サイエンスアゴラ 2008」における日本地球惑星科学連合主催の「博士号取得者のキャリアパス支援の現状と課題—博士のキャリアパスとは?—」へ生科連の依頼により講師として参加した中野氏より報告がなされた。物理学・化学・地学という異なる分野の抱えている共通の課題について情報交換がなされた模様とそれぞれの現状が紹介された。

6) JBO 活動状況および IBO2009 準備状況報告

毛利氏より、今年茨城県つくば市で開催予定の国際生物学オリンピック 2009 (IBO2009) の準備状況と、その日本代表の国内選抜を行う日本委員会 (JBO) の活動について説明と報告がなされた。

7) 生物科学学会連合「附置研究所・センター等の支援に関する声明」について

文部科学省科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会が平成 20 年 5 月 27 日に公表した報告「学術研究の推進体制に関する審議のまとめ—国公立大学等を通じた共同利用・共同研究の推進—」に関連して、学術コミュニティ連合体である生科連の要望を示すものとして、生物科学関連研究施設を支援する趣旨の声明を生科連より発表することが前回連絡会議で決まったことを受け、文案の審議がなされた。

支援の対象を特定の分野に限定せず生物科学全体という視野で行うのが良いのではないかとする一方、抽象的になりすぎないように具体的な表現も加える必要があるとの意見が出た。本件については、各学会で検討後、生科連で集約して再度文案をまとめることとなった。

8) 学会法人化について

浅島前代表より平成 20 年 12 月に新しい公益法人法が施行されてからの学会法人化関連の動きについて説明がなされた。

公益社団法人の認定については、いまだ確定していない事項が多く、施行側でも検討しながら進められているのが実状のようであり、法人化については慎重に状況を見る必要があると述べられた。

9) 今後の課題・報告等

①キャリアパスの問題

5) と関連して、意見・情報交換がなされた。

- ・日本学術会議から提言を出した。総合科学技術会議で予算がついた。女性研究者のポストを増やす、定員割れが問題になっている工学系の博士課程進学者へ補助を出すなどに遣われる。外国人学生の博士課程修了後の調査や補助は既に実施されているが、不況で状況は厳しい。
- ・大学等の教育機関では研究者の所属する研究グループの業績を上げる目的で教育が専門的な内容に偏りがちとなり、総合的な研究者が育ちにくい傾向にある。
- ・ポストを海外へ求める場合、若手の研究者は、欧米への関心は強いがアジアへはまだ十分に目を向けられていない。また、アジアに目を向けられても、国際競争力が培われていないため、出ることができない。
- ・初等・中等教育や高校の教育に携わる者も、学生に夢を与えてその先の道を示すことができるようになりたい。
- ・博士課程の後で、専門的な研究職だけでなく民間も含めた中間的な研究職に就くことも

面白いという意識を育てたい。

- ・希望を持って研究できる場を確保することが緊急の課題である。具体的な数値目標まで立てる必要がある。

財務省が国家予算に新しい枠をなかなか認めない。国の政策に結び付けていくためには、研究者の育て方や仕組みを具体的なところまで提案しないと、難しい。

②生科連の今後の活動と学会間の協力体制について

①と関連して、以下の意見が述べられた。

- ・生科連としても会議での情報交換だけでなく、何か実行する必要があるのではないか。
- ・他分野の大きな連合が主催する学術集会では、企業と若手研究者や学生が参加するセッションが設けられており、休憩時間には繰り返しその案内が流れるなど、企業と若手研究者の関係を繋ぐ体制が整いつつある。生物学系の学会でも、そうした体制を整えるべきであり、生科連には情報提供の機能を期待したい。
- ・生科連として何か具体的な活動を行うには資金的・人的・組織的に難しいのが現状だが、生科連としてあるいは学会間でできることから着手する必要がある。

生物科学に関する多数の学会が存在するが、分野の近い学会は学術集会を同時期に同じ場所で開催することで、学会間の交流を図り、将来的には生科連がアメリカの FASEB のようになるのがよいとの意見があった。まずは、各学会において、比較的近い分野の学会同士で学術集会を共同開催することを積極的に考慮することとし、生科連としてもそうした学会間の連携を積極的に支援することとした。

生物学年カレンダーには各学会の年間行事が記載されており、各学会はこれを今後の学術集会の計画の参考とし、生科連は各学会における学術集会の企画担当者リストを作るなど学会同士がより協力しやすくする体制を整えるための情報を集めて、報告することとなった。なお生物学年カレンダーについては各学会の関連する国際学会の情報も反映してほしいという希望があった。

9) その他

①生物学年カレンダーについて

加盟学会および協力団体の協力を得てまとめられた 2009 年の学術集会情報一覧を生科連ホームページで近日中に公開することが報告された。なおこのカレンダーは学会等より最新情報が入り次第、年間を通して随時更新していく予定である。

②個別の研究施設からのサポートレター依頼について

- ・2008 年 12 月 31 日締め切りでメールによる稟議を行った以下の 2 件の依頼については承認となり先方へ回答したことが報告された。

東京医科歯科大学難治疾患研究所

東京大学分子細胞生物学研究所

- ・熊本大学発生医学研究センターからのサポートレター依頼については、これを支援しサポートレターを提出すること、およびその文案について、いずれも承認された。

③次回連絡会議について

2009 年 10 月 2 日（金）午後開催予定である。

以上